

関下単純接触効果に対する顕在自尊心・潜在自尊心の影響

：対象人物に対する印象評定（顕在指標）に着目して

○三木あかね¹・井川上直秋²・中島健一郎¹

(¹広島大学大学院教育学研究科・²島根大学人間科学部)

問題

本研究の目的は、関下単純接触効果(接触した対象を認識していない状況下でも、反復して接触することで、その対象への好意度が増加する現象; Kunst-wilson & Zajonc, 1980)に対する評価者の顕在自尊心(以下; ESE)と潜在自尊心(以下; ISE)の影響について、接触後の対象への顕在的な印象評定の観点から明らかにすることである。

先行研究(原島・小口, 2007; 藤井, 2014)では、ESE と ISE が内・外集団への評価に及ぼす影響が検討されており、両者の水準にズレがある場合に内集団ひいきが強まることが示されている。関下単純接触効果により外集団への評価が高まること(Zebrowitz et al., 2008)を併せて考慮すれば、対象への評価は、関下単純接触効果だけでなく、評価者のESEやISEによって変動する可能性もある。そこで本研究では、川上・吉田(2013)と同様におたくを題材とした上で、評価者のESEとISEが関下単純接触効果、とりわけ関下単純接触後の対象人物に対する印象評定(顕在指標)に及ぼす影響を及ぼすのか探索的に検討する。

方法

分析対象者 大学生 60名(男性 28名)。

実験計画 接触割合(典型 70%条件, 典型 30%条件, 典型 0%条件)を要因とする1要因参加者間計画。各条件によっておたく写真(典型画像)と非おたく写真(非典型画像)の枚数の割合を変えて呈示した(e.g. 典型 70%条件: 10名の刺激人物写真のうち、7名おたく写真, 3名非おたく写真)。

手続き パソコンによる判断課題(接触・測定)の実施および心理尺度への回答を求めた。判断課題は川上・吉田(2013)の手続きに準じて行った。測定ではIATを用いて、ISEを測定した。断課題終了後、①ESEを測定するために特性自尊心尺度(山本・松井・山成, 1982)、②関下単純接触の顕在的效果を測定するために、質問紙に記述されている架空の他者への印象評定への回答を求めた。具体的には、自己紹介場面に関する刺激文を呈示した上で、特性形容詞尺度(下位因子: 活動性, 社会的望ましさ, 個人的親しみやすさ; 林, 1982)

を用いてその他者への印象を評定した。なお、自己紹介文には自身をおたくであると明言する文章が含まれていた。

結果

質問紙②の社会的望ましさ得点を目的

変数に、接触割合(ダミーコード化)×ESE×ISE(いずれも中心化)を説明変数とする階層的重回帰分析を行った結果、3要因の交互作用が有意であった。単純傾斜の検定を行った結果、典型 70%条件の場合、ESE 高-ISE 低条件は ESE 低-ISE 低条件や ESE 高-ISE 高条件よりも社会的望ましさ得点が低かった(それぞれ $\beta=-1.92, p<.01$, $\beta=1.46, p<.01$)。また、ESE 低-ISE 高条件は ESE 低-ISE 低条件や ESE 高-ISE 高群よりも社会的望ましさ得点が低かった(それぞれ $\beta=-1.08, p<.05$, $\beta=.67, p<.05$; Figure 1)。さらに、典型 30%条件においても、典型 70%条件と同様の傾向が見られた(ESE 高-ISE 低条件:それぞれ $\beta=-1.35, p<.05$, $\beta=.94, p<.01$, ESE 低-ISE 高条件:それぞれ $\beta=-1.26, p<.05$, $\beta=.896, p<.01$; Figure 2)。

考察

本研究の結果より、おたく写真の割合に関わらず、少しでもおたく写真が含まれていた場合、ESE と ISE の高低にズレがある参加者は、おたくへの顕在的な評価が低いことが示された。この結果は、先行研究(原島・小口, 2007; 藤井, 2014)とは水準の組み合わせが異なるものの、「ESE と ISE の水準にズレがあるときに内集団ひいきを示す」という点で共通している。本研究は、原島・小口(2007)の手続きとは異なるため、この結果の解釈においては慎重に行う必要があると思われるが、ひとつの可能性として捉えることが出来るだろう。

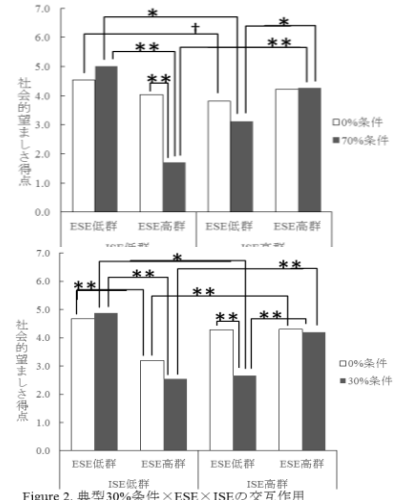


Figure 2. 典型30%条件×ESE×ISEの交互作用